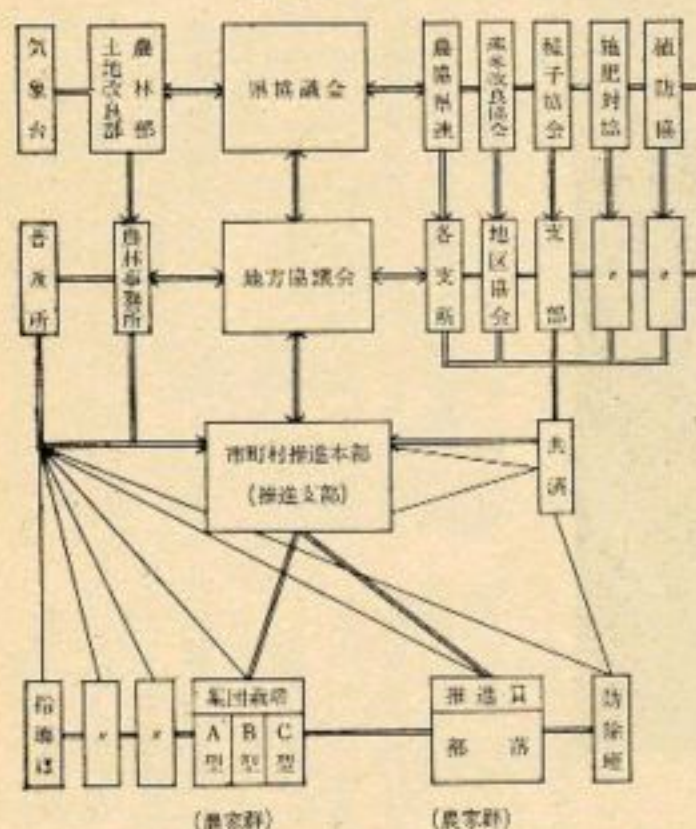


指導体系図 (四)



すすめてきた。

さいわい初年度三十九年は、五十六万六千ト、史上最高の、の豊作にめぐまれた。四十年も異常な天候を克服して作況指数九十八、五十四万トにこぎつけた。

三年目の昨年は、八月以降の好天で、一時は史上第二の農作かといわれたが、山間部の不ねんが多かったため、平年作にやや近い五十三万トにとどまった。しかし注目されたのは病虫害による被害のめざましい減少であった。その原因は「稲づくり運動」の、キメのこまかい対策が効を奏したものとみられている。

こうして四年目をむかえた「健康な稲作り運動」は、関係団体と検討を重ねた結果、新しく策定された。第二次総合開発計画、ともにらみ合せ、関係団体が機械的な分担をすることとして、ことさら「一俵増産稲づくり運動」として展開されることになった。

「いままでの運動は、いわば、精神運動」

動で、稲づくりに対する関心を高めることでは効果があつた。新しい増産運動は反当一俵増産。三〇割を省力。しかも上級米九〇割以上を確保しようと、具体的な目標を定めたところに特長がある」と小畑知事もいっている。

協業方式で二千集団

新しい「稲づくり運動」の目標は、いちおう昭和四十五年までと定められている。

八十町当り一俵増産は、現在の県平均四百五十四トを六十ト増収して、五百十四トの安定した栽培をしようというもので、この数字は、昨年の山形県平均収量とはほぼ同じである。

八十町当り三〇割省力。現在反当百五十人を要する労働者を、五十人分をトラクター、除草剤、刈りとり機などの導入によって省力し、反当百人程度で栽培しようというもの。

△上位等級米九〇割以上確保。現在上位等級米は平均八一・二割であるが、新しい技術開発によつて、上質の秋田米を九〇割以上確保しようというものである。

△新しい運動の特色は市町村に運動の本部を置いた点であろう。市町村推進本部は市町村、農委、

農協など関係団体で構成し、図(一)で示したように各関係機関が機能を分担し、実践主体を部落においた、新しい方式がとられていることである。

「増収」「省力」「品質向上」を軸とするこの運動の具体的な対策事業としては、用排水の整備七千八百ト、区画整理を中心とするは場整備一万二千ト、農道整備百三ト、漏れ田改良九百五十ト、秋落水利改良八百トなどが見込まれている。

増産のカギは品種選択・健苗育成

この運動の主軸である「集団栽培方式」は、農作業の協定、共同化への足がかりとして四十五年まで二千集団(六万一千ト)を予定するほか、より充実した大型農業機械を組入れた、高度栽培集団を六十一集団見込んでいます。

このほか安定した奨励品種の作付、保護苗代による安全稲作の確保、肥料の設備など増収への総合的な技術指導の強化などがおりこまれている。

ここで、さきに県庁で開かれた「米づくり座談会」のもようにふれてみたい。座談会には、米づくり日本一など県内の米づくり名人十名と学識経験者が、小畑知事など県の関係者、それに各農協連代表と約五時間にわたって話しあった。

四十年、四十一年とこのところ冷害がつづいているところから、名人たちはこれをどのようにしてのりきったか、どうすれば克服できるかなどが発表されたもので、ことしから進める「増産計画」の大きいポイントとしておりこまれることになったものである。

山本 喜七郎さん(花輪町・四十一年度技術賞・五十二歳)

鹿角地方は冷害地帯であるが、昨年七月の長雨にたたかれ、さらには刈り取り以降の長雨で収納がくれ大きな被害をうけた。これは天候不順のほか品種の選択が適切でなかったことも原因と思われる。

いって、土壌管理の万全を期し、とくに四月以降の天候を重点としたい。品種の選択はイネの適性を見極めて、安全な山穂期に穂ぞろいをさせたい。山穂期はヨネシロが八月十四日頃、ミヨシは八月二十日頃としたい。

工藤 雄一さん(比内町・二十七年地域賞・四十五歳)

昨年は比内地方も大きな冷害にたたかれた。これは品種の選択に誤りがあったものと思う。反省してみると地域の人は計画的なイネづくりをしなかった。出穂を早めなかったのかかなりの障害もねんも出た。ニシキ系統は不ねんが出て評判が悪くした。

また苗づくりも粗雑であり、冷害克服のためにも三草栽培と本気に取り組む必要がある。

水管理は雨が多くて楽であったが、夜間低温を防ぐ水が、日中でもかけ流しなど管理のじゅうぶんでないものが見られた。冷害に強く発芽が早いヨネシロこそ